

目から正捕手として活躍した。この写真は吉原伝説のベストショットである(播磨節子さん提供)

SPORTS



吉原(前列左端)は小さいころからスポーツ万能で本荘小学校時代は相撲などの県大会で優勝した(木下末喜さん提供)

戦火に消えた名捕手

吉原正喜 ①

2連覇したワールド・ベースボール・クラシック(WBC)5試合に登板した馬原孝浩まで多くのプレーヤーを輩出する。プロ、アマを問わず、記録と記憶に残る郷土選手を県出身のノンフィクション作家、澤宮優氏が熱い思いをつづる野球賛歌。題して「澤宮優 熊本野球人列伝」

「巨人軍最強の捕手」園準優勝を飾り、昭和捕手は巨人にはいなと呼ばれた吉原正喜 13(1938)年、巨いは、ビルマで戦死した人に入団した。吉原は、伝説の熊本野球人を綴るにあたり、もつと悲劇の名捕手である。1年目から正捕手とも記憶に残った吉原の熊本工高で、川上哲也、同僚の千葉茂は、後実像を描くことで、古い世代だけでなく若い人たちへ彼の凄さを伝えようと思った。

野球以外にも、陸上リレーや相撲でも優勝している。熊工へ入学するのと2年生で正捕手となった。当時の人気力一ドは、熊本の「早慶戦」、熊工対熊商である。その中のスターが「胴間声である」吉原はいつも手を抜かなかった。熊工の後輩の捕手武宮敏明(後)は「あのバックアップで投げた。打者が」

熊工は甲子園に駒を進める。甲子園では調に勝ち進み、決勝は藤村富美男投手(後)が、脳震盪のためグアウトに運ばれたとき9番ライトの川上と、鼻に大きな紙粘りは藤村の球にまったく手が出さず3打席3三振に現れた。その根性に味方も敵に終わった。川上は、観衆も大いに驚いた。



さわみや・ゆう ノンフィクション作家。昭和39(1964)年、八代市(旧鏡町)生まれ。宇土高、青山学院大、早稲田大卒。約20年のサラリーマン生活の傍ら作家としてスポーツ、特に野球を中心に多彩な執筆活動を続けてきた。

戦死した名捕手、吉原正喜の生涯を描いた「巨人軍最強の捕手」でミズノスポーツライター賞を受賞。主な著作に「炭鉱町に咲いた原貢野球」「プロ野球 いぶし銀のベストナイン」「1000年の海を渡った大王の棺」「放浪と土と文学と一高木護・谷川雁・松永伍一」など。近著「ドラフト1位 9人の光と影」は野球評論家から高い評価を受けている。中学時代から強迫性障害に悩み、高校時代には不登校も経験。教育機関などで自身の体験を語る講演も続けている。横浜市在住。澤宮優公式サイト (<http://www2.odn.ne.jp/yusawamiya/>)

載

毎週火曜日掲